九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

16世紀ロンドンにおける貧困児教育発明の社会的文脈 : クライスト・ホスピタル設立時のR. グラフトンをめぐる諸関係から

野々村, 淑子
九州大学大学院人間環境学研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1456067

出版情報：大学院教育学研究紀要. 16, pp.19-36, 2014-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学研究紀要，2013，第16号（通巻第59集），19-36
Res. Bull. Education, Kyushu U., Vol.16, 19-36

16世紀ロンドンにおける貧困児教育発明の社会的文脈

── クライスト・ホスピタル設立時のR. グラフトンをめぐる諸関係から ──

野々村　淑　子

はじめに

本稿は，1552年ロンドンに設立されたイングランド最古の子ども向け救済施設であるクライスト・ホスピタル（Christ's Hospital，1552～，以下CHとする）の設立と運営の中心的存在であるリチャード・グラフトン（R. Grafton, 1511～1572）の活動，それを取り巻く人々や諸機関との関係を通して，近世イギリスの貧困児，孤児，棄児などの子どもを対象とする救済施設の設立，運営維持の初期形態を明らかにすることを目的とする。

イギリス子ども史研究によれば，CHは，コミュニティの支援によって支えられた孤児院であり，主としてトマス・コーラム（Thomas Coram, 1668～1751）という篤志家の私的善意と尽力によって成立し展開した18世紀のロンドン・ファウンドリング・ホスピタルとは異なると言われている(1)。本稿でみるように，CHの設立と展開には，宗教改革に揺れるチューダー朝の動乱のなかでの王室，国教会という国家権威の動揺，囲い込みによる都市への人口流入，修道院改革によって救済主体を失った貧民，浮浪者層の問題化等に苦慮するロンドン市，議会（庶民院），そして同業組合（グロサリー・カンパニー）等，当時のイギリス，ロンドンの政治を司っていた諸権威，公共圏を形成していた諸団体，組織が関与していた。しかしその関係は，興味深いことに，R. グラフトンというひとりの人物を中心に，結びあわされていた。すなわち，政治的，宗教的動乱のなかにありながら，そして親しい友人たちを粛清のなかで失いながらも，常にその政治的中心の側近として位置付き，存在感と影響力を行使し続けることで，結果としてCHの初動を支えたのが，CHの会計の責任者であり，受付簿にも子ども救済に際して名前が散見されるR. グラフトン個人の働きであったのである。個人的功績や政治的立場の顕示をできる限り回避し，権力抗争に巻き込まれることなくCHを初めとするロイヤル・ホスピタルの維持に尽力し，時に金銭的供出も惜しまなかった彼の足跡を辿ることによって，CHを支えた当時の社会的文脈，諸組織や人々の，貧困児救済，貧困児教育創出への動きを照射することができるだろう。

救貧法下，ワークハウスでの労働強制による貧困児救済への異議申立て，オルタナティブな施設設立を掲げて成立したのが，18世紀のロンドン・ファウンドリング・ホスピタルであるが(2)，ここでは，遡って16世紀半ば，エリザベス救貧法にて体系化される以前，国家的な救貧政策の提示に至るプロセスにおいて，貧しい子どもたちが，国家，教会，市民社会の協調によって救済対象化され，

施設化され，養育，教育を施されることになった経緯，その歴史的意義が究明される。それは，イギリス史における「福祉の複合体」[3] の近世的あり方の一形態を照射すると共に，社会による救済対象としての子どもの発見，および，それに伴った貧困層の子どもへの教育の発見と，その歴史的経緯を解明する一助となるであろう。

CH 史研究としては，CH の設立経緯，初期（16世紀）の組織，管理運営，歳出歳入，役員と職員の職務，入所児童の生活や徒弟派遣状況，退所後の進路などを明らかにし，その養育，教育の手厚さを指摘したマンジオーネによる研究[4] をふまえつつも，このような運営を支えた公共圏のなかに，CH を位置づける作業となる。1552年から55年まで財務担当役員，つまり会計係（Treasurer）を務め，併せて1552年から63年まで11年間理事（Governor）を務めた R. グラフトンについて，マンジオーネは，「最も卓越した」理事であった[5] と評している。クライスト・ホスピタルの設立に関する定評ある同時代史[6] を著したジョン・ハウズ（John Howes）が，R. グラフトンのサーバントであり，徒弟であったことは，クライスト・ホスピタルにおけるその存在感と次世代育成の足跡を示している。表舞台に名を残すような動きを自身が避けていることから，その足跡をたどることで逆にその周りでこの施設を動かしていた人々や組織の論理を浮かびあがらせるだろう。

さらに注目すべきは，「チューダー朝イングランドにおける社会福祉の最も壮大なる実験」[7] とされるロンドン・ロイヤルホスピタルズのなかで，CH は当初より子どもの教育に力を注ぎ，古典語教師も配していた。人数としては少なかったが，CH からオックスフォード大学，ケンブリッジ大学に進学した者がいたのは，16世紀初期の記録にも確認できる[8]。イギリス史における，貧しい子どもへの教育的配慮の由来を，それを成立させた社会的文脈に位置づけるという作業が，本稿の課題である。ならず者（vagabonds），物乞い（beggars）の施設収監への動き[9] とほぼ同時に，彼らに紛れて存在していた子どもが注目され，彼らに特化した養育施設の設置，教育供与が，エリザベス救貧法以前のロンドンにおいて企図されたのである。その後18世紀には，CH は，経営的困難を克服するために通学生を受入れ，給費生を存続させつつ徐々に進学校へと変貌を遂げる[10]。貧困児救済と教育の不可分な関係のひとつの源流をここにみることができる。その初発を支えた社会的文脈の解明は，近代英国の子どもの歴史研究において不可欠であろう。

CH に設立において重要な役割を果たしたのは，王家の支配下にあった聖フランシスコ会グレイ・フライアーズ修道院跡を，貧民救済のために下賜請願を行ったロンドン市，その認可主体である国王（ヘンリー８世，エドワード６世）および T. クロムウェル等その側近，その仲介に尽力したカンタベリー大司教，ロンドン主教などの国教会聖職者である。グロサリー・カンパニーの一員であると同時に，印刷職人という宗教改革期に重要な職に従事していた。以下，R. グラフトンをめぐる周囲の動きを追いながら，CH というイギリスにおける貧困児救済施設の創出の論理とそれを支えた社会的文脈を明らかにすることとする。

Ⅰ．CH 設立に至るまで

1．出自による人脈

R. グラフトンについて最も詳細な情報は，1901年にグロサリー・ギルドの一員として G. グラフトンについての史料を収集しまとめた J.A. キングドンによる評伝[11]である。ここでは，ひとまずキングトンに依拠しつつ，クライスト・ホスピタルに関わる R. グラフトンの足跡とそれを支えた人間関係を抽出してみることとする。

キングドンによれば，R. グラフトンは皮革業者である父ニコラスを早くに亡くしたが，祖父アダム・グラフトンは，エドワード５世，ヘンリー７世期に牧師（chaplain）として名を残した人物であった[12]。アダムは，トマス・モアとも親交があったという[13]。そのような出自は，R. グラフトンの生き方に大きく影響したようである。

> 1534年，R. グラフトンは成人を迎え，グロサリー・カンパニーの年季が明けていた。大司教クランマーが，彼（グラフトン）を宰相クロムウェルに紹介した1541年には30歳を超えていただろう。クランマーは，1537年に翻訳がおわり，印刷されていたマシュー版聖書とともに，クロムウェルにグラフトンを紹介した。グラフトンは，おそらくこの印刷の仕事に１年ないし２年以上携っていた。…グラフトンの仲間たちは，疑いなくニュー・ラーニング派（the party of ‘New Learning’）に属していた。すなわち，究極的にはアングリカン教会（the Anglican communion）を外国の支配から解放する一派である[14]。

英訳聖書の作成，印刷は，「ニュー・ラーニング派」と呼ばれた信仰運動の「ローマ離脱」を軸とした改革運動の中心であり，それを周知させる手段でもあった[15]。R. グラフトンは，ヘンリー８世期の有力者カンタベリ大司教トマス・クランマーと，宰相トマス・クロムウェルの下で，若くしてその仕事を任されていたのである。印刷業が，新しい学問，思想の普及にとって大いに意味のあった重要な仕事であったことはいうまでもない。

> 英訳聖書によって，そして修道院改造によって，クロムウェルは，クランマー大司教と協力し，国王が，英国国教会からローマ・カトリックの権力を消滅させることを可能としようとしたのである。そして，まさにそのことによって，ロイヤル・ホスピタルの設立は可能となったのである[16]。

信仰刷新，ローマ・カトリックからの離脱を図る大司教クランマーと，王室の財源確保と権力の集中を策する宰相クロムウェルの思惑は異なっていたが，このような国家戦略と深く結びついた英訳聖書の印刷と，ロイヤル・ホスピタルの設立，両方に R. グラフトンが深く，ほぼ中心的に関わっていたことは，国王の側近，宰相と大司教といった権力者たちの野望における，R. グラフトンの役割

の重要性を物語っていよう。

2．ロンドン市による貧民救済事業への準備着手

このような国家的な展開に伴いつつ，ロンドン市は，それらとは幾分異なる目的をもって，修道院に代わるホスピタル，施療院の設置に着手しようとしていた。1537年7月，市長 R. グレシャム（Sir Richard Gresham）とその側近，長老参事会員たちは，国王のもとに書簡を送る。それは以下のような内容だったとキングドンは述べている。

> われわれ市の役員は，聖メアリー施療院（Spytell），ベドラム施療院，聖バーソロミュー施療院，聖トマス施療院などと呼ばれるロンドン市内のホスピタル，施療院に属する土地，建物，収益などを整備し，規則化し，秩序をもって管理することを願うものである[17]。

これが，ロンドン・ロイヤル・ホスピタルの設立の第一歩である。この書簡自体に R. グラフトンは関与していなかった。英訳聖書への許可等のために，パリにいたためである。その後，ロンドン市は「貧民の使用のために，修道院跡の下賜を願いでたが，許可されなかっただけではなく，ほとんど気にもとめられなかった」[18]。しかし，1539年4月から開会した議会の修道院解体についての審議のなかで，その土地や収益などの使い道について，クランマー大司教と，ロンドン主教ラティマーが次のように主張したという。

> 国王といえども，人々の善意からの資金，土地や収益などを私用に供することは理に適ったことではない。それらは，学校や，ホスピタル，教護院など，公的な使用（public use）に充てられるべきであろう[19]。

クランマー，ラティマーらはロンドン市の動きを認知し，同調していたのではないかとキングドンは推察している。王室の財源化を目論む国王，クロムウェルは，同意し難かったが，黙認せざるを得ない状況であったということである。

1539年秋，R. グラフトンはパリからロンドンに戻る。

> この時が，グラフトンが公的な目的のために（for public ends）修道院を利用するという計画に，個人として巻き込まれ始めたときであった。新たに明け渡されたグレイ・フライアーズの建物内の一区域に，印刷所を設ける案を提出したのは，間違いなくグラフトン本人であった。そこで，まずはパリから輸入によって，そして将来はここロンドンで英訳聖書を印刷するという計画だった。しかしその後，おそらくは国王の意志によって，修道院全てをグラフトンが自由に使える便宜が図られた[20]。

グレイ・フライアーズとは，聖フランチェスコ会が13世紀にイングランドに布教に訪れた際に設置した修道院のひとつである。ヘンリー８世による修道院への権力行使に抵抗を示していたが，1538年明け渡しに応じた。その後，王室の財産となっていたが，ロンドン市が貧民救済のために下賜を陳情し，CH が設置される[21]。

興味深いことに，ロンドン市がその利用許可を獲得する以前に，R. グラフトンは既にグレイ・フライアーズに作業場を構え，「王の仕事」つまり「英訳欽定聖書，マシューズ・バイブル（Mathew's Bible）印刷」に取りかかり，クロムウェルやクランマー大司教はそれを全面的に支持していたのである。宰相クロムウェルが失脚した後においても，クロムウェルの庇護の下にあったにもかかわらずこの印刷所が継続したことは[22]，時の権力の庇護下にいながら，その趨勢に左右されずに常に主流派の下で仕事に徹してゆける，R. グラフトンの類稀な能力のひとつを物語っているといえよう。

３．宮廷による CH 設立嘆願受理

このような R. グラフトンの位置は，王室との関係においても同様だった。ヘンリー８世の６番目の，かつ最後の王妃キャザリン・パーは，R. グラフトンもその学派の下で印刷業に勤しむ「ニュー・ラーニング派」といわれる改革派との親交あつく，高い教養をもって，義理の息子であるエドワード王子（後のエドワード６世）の教育にあたっていたという[23]。そのような折，1545年から46年にかけての時期，R. グラフトンは，ヘンリー８世の命により，王室のプリンター（King's printer）であると同時に，王子エドワードのサーバントとなった[24]。プリンター，印刷職人という立場の，宗教改革期イギリスの王室，国家，国教会にとっての重要性については，先にも触れたようにいうまでもない。さらに，王位継承者であるエドワード王子の側近である。

> グラフトンが宮廷での任務を指名されたことが－国王はまだグレイ・フライアーズの家主だったので－そこに居を構えるということをさらに確かなものとしたとしたら，そのことによって，R. グラフトンが，貧しい人々による利用のためにその建物を手に入れるという計画に際して，同志の市民たちを支えることにより貢献したといえる[25]。

キングトンがこう述べているように，宮廷人としても重用された R. グラフトンの存在が大きな意味を持ったことは疑い得ない。

1543年にも，ロンドン市は国王への嘆願を提出したが，快い返事は戻って来なかった。しかし1546年末，ヘンリー８世の死期に近づいたころ，ついに下賜が決定する。

> 国王の従軍（スコットランド侵攻）からの帰還兵が，貧しく，不具，病に冒され，ペスト流行の打撃でホームレスの貧民たちで溢れた通りに，さらに押し寄せて群れをなしていた。R. グラフトンはまさに，国王の親密圏内にいたため，友人たちの計画を王が快諾するように間接的に働きかけることが可能だったに違いない。国王の死期が近づいた1546年末，承諾証書（the

indenture of agreement）が国王の側には国王の印章，他方には市長と平民，市民の公印が押印され，ホスピタルとそれに付随する教会の経営が，永久の基金のもとで，ロンドン市の市長と庶民（commonalty）に委譲された。グレイ・フライアーズの教会は，新しい教区の教会となり，…（他の教区と合併し）ニューゲートのクライスト・チャーチ教区と名付けられた。この教区にグラフトンは住み，結婚した。この新しいクライスト・チャーチの教区簿冊には「マーチン・グラフトン（グラフトンの長男：引用者注）が1547年５月２日に洗礼を受けた」と記録されている[26]。

国王ヘンリー８世は1547年１月28日に逝去する。グレイ・フライアーズの下賜は，死に臨む間際，「天国での救済を期して」[27]決心したというのが，CH 沿革史の著者ピアスの言葉である。R. グラフトンの存在が，ここでもまた大きな意味を持っていたことは，推測しうるだろう。

Ⅱ．CH 設立の経緯のなかで

１．国王エドワード６世によるロンドン・ロイヤル・ホスピタル始動

エドワード６世への王位継承後，R. グラフトンは引続き王のプリンターを務め，９歳という若き国王への私的サーバントの任務も継続した。

このような決定（R. グラフトンの王室での役割継続）は必然であった。というのも，９歳の少年に，助言者とは独立した権威主張は不可能だったからである。亡き国王の遺言執行者たちが若き国王の諮問機関を組織したが，彼らのほとんど全員が，グラフトンが共に行動し慣れた者たちであり，グラフトンの仕事を自然に進めていく上で妨害となるような者もいなかったのは，彼にとって好機であった。特に称号を冠されたわけではなかったが，王冠のもとでの責任ある仕事であった。1547年４月22日，グラフトンは辞令を受けた。同日，グラフトンと協同していたエドワード・ウィチャーチが再び，特別認可により，７年間の祈祷書の印刷権を得た[28]。

評伝作者キングトンの視点が，グラフトン寄りにあることを考慮したとしても，ヘンリー８世，エドワード６世双方，そして両者の側近諸氏からの信頼がなければ，このような任務に引続き指名されることもないだろう。グロサリー・カンパニーでの役割も承認されつつ，R. グラフトンは新国王の教育を含めたサーバントとしての任務に尽力する。

主教リドレーと，グラフトンによって，国王エドワード６世は，その為政の末期に近づくにつれて市民の考え方に近づき，貧民への共感（sympathy）に関心を向けるようになっていた。（親密であった伯父サマセット公の1549年の失脚，1552年の処刑などの：引用者注）国王自身の悲しみも，悲嘆にくれた他者への傾倒に向かわせたであろう（His own sorrows bent him towards

others in distress.)。そして彼は，市民たちの計画が，自身の関心と呼応しているのに気づいたのである。彼らと連携し，国王は，ゆるぎない礎のもと，ロイヤル・ホスピタルを設立した。枢密院ではなく，司教を通じ市民たちと通わせた若き国王の感情そのものが，このような結果を生んだのである[29]。

主教リドレーは，病人の救済と悪徳の統制のため（for the relief of sickness and the control of vice)，そのために修道院跡を管理下に置いて利用するという計画について，市民たちから国王に，パーソナルな親交のなかで進言するような関係をつくろうと心を砕いていた[30]。

この，ロンドン司教ニコラス・リドレー（Bishop Ridley, 1500~1555）とも，R. グラフトンは親交を結んでいた。

市民はホスピタルの維持，運営のシステムに携っていたが，主教リドレーと R. グラフトンは，1549年３月に印刷，発行された「共通祈祷書（the Book of “Common Prayer”)」を通して密な交流があった[31]。

R. グラフトンは，市民という立場であったが，改革派の信仰刷新の核となる英訳聖書，共通祈祷書の印刷，発行に従事していたが故に，宗教人との親交があり，しかもその仕事のため（CH となる）グレイ・フライアーズに住み，さらには王家のプリンター，サーバントとして国王とパーソナルな関係にあった。彼が，ロンドン市（市長と長老参事会員など)，主教の意向を国王に伝え，ホスピタル設立実現化に向けてなんらかの努力をしたというのは，ほぼ間違いないだろう。しかし，キングドンが，R. グラフトンを評して「目に見えない位置を保っていた」というように，彼は常に歴史の背後に位置していた。それぞれの役割に従事したという記録以外に，彼自身の意向や感想などは残されていない。以下は，R. グラフトンによる年代記である。

かの（サマセット）公の死（1552年１月：引用者注）からまもなく，ロンドン主教であるリドレー師が，ウェストミンスター寺院にて国王に説教をされる機会があった。そこで師は，持てる者（the riche）に対し，持たざる者（貧民たち the poore）への慈悲の心を，実り多く信仰深い勧めとして熱心に説いた。そして，貧民たちを慰め，救済する慈善深い方法を示すことによって，国王の心を揺さぶったのである。…国王は，この地域，特にロンドン・シティにたくさんの貧民たちが溢れており，しかし彼らに何らの良き統制が取られていないこと（that no good order was taken for them）を了解しており，師の説教が終わるやいなや，すぐに話をしたいと申し入れた。…リドレー師の説教への心からの感謝の言葉と共に，…国王は，貧民救済の勧めを師に委ねつつ，…その救済のための良き体制を考案するべきであると伝え，次のように続けた。それゆえに，この国の最高権威にある私は，自らこのことに留意しなかったとしたら，その過

失を神に弁明しなければならない。私たちが配慮すべき，神の貧民，貧困者たち（his poore and nedie members）に共感し，神の命令に従わなければならない。ああ，我が主よ，私は何よりも先にそれを行いたい。貧民たちへの援助に心を砕いてきた，そしてそれに最善を尽くしてきた人々との協議を重ねてきた師のこれまでに培ってきた知恵や知識を信頼し，それを理解することを熱望しているし，貴方のために祈りたい。…

主教は，国王の賢明さと真剣な熱意に感激し，言葉を失った。…その後，貧民救済のために努力をしてきた多くの市民の偉大さ，…さらにその慈悲深さは疑うことはなく，そして国王が，ロンドン市長に恵み深い手紙を認めたなら，双方にとってすばらしいことではないかと考えたのである。…そして王からの手紙を市長に届けることを約束した。王は，手紙を書くことを承認しただけではなく，主教にそれを書き，サインをするまで留まるように命じ，さらにそれを渡すだけでなく，市長にそれが国王の特別な要求，指示であることを示し，市長がそれをすぐに実行にうつし，その進捗を国王に知らせるよう伝えてほしいと述べられた。…主教は喜んでこの手紙を，時のロンドン市長，リチャード・ドブ卿（Sir Richard Dobbes Knight）に渡した。…市長は喜びと共に手紙を受け取り，…次の日に主教と夕食を共にすることを申し出，そこでこれらのことを実行に移すことを述べた。そしてまず２人の参事会員と，６人の庶民（commoners），またさらに24人を指名し，事業開始に取りかかった[32]。

キングドンのいうように，R. グラフトンは国王と主教，市長の動きを淡々と記録している。ロンドン主教リドレーの，エドワード６世への貧民救済という慈悲深い行為の重要性を訴える説教と，その後の会話のなかで，ロンドン市長への書簡を王が認め，それをリドレーが届けることから始まった，ロンドン・ロイヤル・ホスピタルの創設への動きである。ここで興味深いのは，その誰もに通じ，パーソナルな関係を保っていたのは，まるで自らは存在しないかのようにその経緯を記述する，R. グラフトンその人だったのである。

２．ロンドン・シティによる貧困対策整備

当時のイギリス，ロンドン市の貧民対策が，「貧民への共感，慈悲」という文脈のみで取組まれたものではないことは主教リドレー以前に，王に対して行われた説教[33] にもある通りである。R. グラフトンの弟子にしてサーバント，J. ハウズはロンドン・シティの様子を描写している。

これほど多くの貧民たちが，ロンドン・シティの街で物乞いをし，無為に浮浪している時代があっただろうか。…[34]

J. ハウズによるこの CH 設立の同時代史は，「権威（dignitie）」と「義務（dutie）」の対話形式で，後者が CH の歴史を語り，前者がそれを称えるという筋立てで書かれている。上記の台詞は冒頭で「権威」が発したものであるが，それに対し，「義務」は過去のこのような状況への対応を語りつつ，へ

ンリー８世，そしてエドワード６世の偉業として，聖バーソロミュー・ホスピタル，さらにCHを含むロンドン・ロイヤル・ホスピタル設立に至る，このような未曾有の事態への対応を語る。

> あらゆる貧民の数が増えていた。教会，街や路地が，無様で不愉快にして，胸が悪くなるような怠け者たちで溢れたのである。しかし，聖バーソロミュー・ホスピタルは，供されるべき人々の10分の１も受入れることができていなかった。説教壇にいる説教者は，これらの貧民を救うために気前よく与えるよう，人々を促していた。しかし特に偉大なる国王に熱のこもった説教を述べられた主教リドレーが，貧民救済の必要を説き，王がそれに従われたのである[35]。

実際の貧民たちのおおよその数をJ. ハウズが記録している。「父のいない子ども…300人，病人…200人，子ども連れの貧民…350人，老人…400人，没落世帯主…650人，怠惰な浮浪者…200人，現在救済を必要としている人々全ての数は，2160人（ママ）である」[36] とある。この数について確かめようがないけれども，当時の人々にとって街に浮浪する人々，貧民の存在が脅威であったことは確かのようである。

ロイヤル・ホスピタルのなかで，聖バーソロミュー・ホスピタルは，他に先駆けて1548年にロンドン市の所有となった。R. グラフトンは当初は役員ではなかったが，1551年，当ホスピタルの役員（Governor and Treasurer）となっている[37]。クライスト・ホスピタルの経営が発足したのは1552年，その経緯は以下の通りである。「義務」は語る。

> 市長とその同志は，国王の書簡を吟味し，10人か12人ほどの賢明な市民を招集，彼らと会合し，何を為すべきかの相談に乗るように長老参事会員（Aldermen）に指示した。その後，主教と学識ある市民の会議を重ね，貧民たちへの救済の内容と方法を取決めた。それは，たくさんの怠惰な貧民たちと浮浪している物乞いたちをロンドンの街や家々から除去し，そして，若き，そして年老いた，悲嘆にくれた，あるいは好色なごろつきたちが，コモンウェルスに相応しいメンバーとするためのものだった[38]。

最初は以下のような体制であった。

> 長老参事会員と，市民併せて30人で構成される会議を置く。…この30人委員会は，ギルドホールの会議室でほぼ毎日会合をし，その発足のあり方を考え，それぞれの職業と能力に応じ，20ポンド，10ポンド，あるいはそれより少額の者もあったが，寄付を課すことを自分たちで決定した[39]。
>
> その中の12人がクライスト・ホスピタルの担当となり，R. グラフトンがその一員となった。さらに６人が聖トマス・ホスピタルの担当となった[40]。

クライスト・ホスピタルの初期の経営形態，組織や資金等については，マンジオーネの研究[41]に詳しく，詳細については，そちらに譲ることとする。ここでは，そこでのR. グラフトンの位置づけを確認しておく。彼は，その後，1553年にロンドン・ロイヤル・ホスピタル（クライスト・ホスピタル，聖トマス・ホスピタル，ブライドウェル）の財務担当役員（General Treasurer）となる。

リチャード・グラフトン氏，プリンター，1553年に財務担当役員となる[42]。

R. グラフトンは，聖バーソロミュー・ホスピタルの会計担当であった実績から，このような役割が命じられたのであろう。1557年には聖バーソロミューの財務担当役員の職務は引退し，クライスト・ホスピタルの財務担当役員として，バーソロミューとの会計の峻別に苦心したという。

ここで重要なのは，このような体制で臨んだ初期のCHの役員会（30人委員会）の，貧民救済観である。

委員会は，さらにシティ外部からの物乞いの移入を禁じる宣言を出した。また，ハンセン病の施療院にいる患者達に以下のように命じた。施療院の経営者と協力して，彼らに給付金を支給しているシティを煩わせるようなことがないように，と[43]。

先の引用[44]にもあるように，物乞い，浮浪者による街が乱れていること，それを排除し，あるいは「コモンウェルスに相応しいメンバー」にし，コモンウェルスをあるべき状態にすること，つまり包摂していくことが，市長や長老参事会員，つまり市民社会の意向であったといえる。

1553年7月6日，エドワード6世が夭逝する。その後の政治的混乱のなかで，R. グラフトンは，そのプリンターとしての職業ゆえに，王室での役割を終えた。しかし，市民としては，その後もホスピタルの役員に継続して選ばれ，グロサリー・カンパニーにおいても役員となり，また庶民院議会にも議員として選ばれるなど，信頼され，要職を歴任している。しかも，王室関連の用務としても，メアリー女王即位行事においては，その計画を任されるなど，その役割を継続しているのである[45]。

こうしたことは，R. グラフトン自身の世渡りの巧みさが，あるいは影響しているかもしれない。しかしここで確認すべきはむしろ，クライスト・ホスピタルという貧民救済の施設，イギリス初の貧困児，孤児，棄児などの子ども救済施設が誕生する経緯には，以上のような，王室，宰相などの王の側近，国教会，ロンドン市の上層部，さらに同業組合という当時のロンドン社会を支配していた組織の事情と，貧困児救済への期待，そこでのイニシアティブの駆け引きがあったことである。しかし議会や施設内での役員会など，ある程度開かれた議論空間，公共空間が形成され，そこでの合意によって事業が展開していた。ここまでみてきたように，R. グラフトンは，そのような議論をうまく繋ぎ，それぞれの思惑が同調していくように働きかける役割を担うのに適任であったということができる。逆にいえば，彼のような繋ぎ役がいなかったとしたら，この大事業は始まっていな

かったともいえる。

Ⅲ．貧困児教育創始の論理

貧民のなかでも，特に子どもを対象とする事業として，クライスト・ホスピタルはそれまでの貧民救済とは異なる。貧しい子どもへの配慮，とりわけてクライスト・ホスピタルのように設立当初から教育的配慮をも施していた，その思想的基盤はどのようなものだったのか。

ピンチベックとヒュイットによれば，CH の事業は，当時のヨーロッパで注目され，イギリスでは1535年に翻訳された L. ヴィヴェスの『貧民救済について』（Juan Luis Vives, *On Assistance to the Poor*, Bruge, 1526）の実現化であったという[46]。その影響関係については，改めて検証する必要があるが，ここでは，R. グラフトンの足跡に即し，貧民をどのように捉え，その救済に臨んだのか，そしてなかでも子どもに着目した理由や経緯は何か，そして彼がその教育に携った局面を見ることから始めてみよう。

１．貧民の分類

R. グラフトンは，その年代記において，以下のように記している。

（クライスト・ホスピタルの設立にあたり：引用者注）２人の長老参事会員と，６人の市民（Commoners），さらに24人の市民が指名された。数回の会合の後，主教の主導のもと，規則を決定した。そのなかで，貧民についての，以下のような分類，９つの種類と，それを３つの段階区分がなされた。

貧民についての３段階　無能力貧民（the poor by impotencie）
一時的貧民（the poore by casualtie）
浪費的貧民（the thriftless poor）

１．無能貧民は以下の３つに区分される。
　１．父のいない子ども，もしくは貧民男性の子ども
　２．年寄り，盲目の人，足の不自由な人
　３．ハンセン病人，水腫病人
２．一時的貧民
　４．傷病兵
　５．貧困世帯主
　６．重大な病気の罹病者
３．浪費的貧民
　７．全てを浪費する暴徒

8．どこにも定住しない浮浪者，無宿人
9．怠惰な者，売春婦

これらの貧民たちにそれぞれ３種類の家（house）を用意するため，第１に無垢で父のいない子どもたち，つまり物乞いの子どもたち，物乞いの種であり，種畜である者たちには，ロンドンの元グレイ・フライアーズ，今ではクライスト・ホスピタルと呼ばれる家が用意された。そこでは，貧しい人々は，物乞いの状態を打ち破る（overthrow）べく，神の知において教育（trayned）され，有徳な訓練（exercise）を受ける。

第２の人々には，サザークの聖トマス・ホスピタル，そしてウェスト・スミスフィールドの聖バーソロミュー・ホスピタルが用意された。そこでは，少なくとも200人の病人が寄宿し，治癒されるだけではなく，食事と，滋養を与えられた。

第３の人々には，ブライドウェルが与えられた。そこでは，悪徳にみちた怠惰な生活を打ち破るべく，浮浪者と怠惰な売春婦が厳しく折檻され，労働を強制される。

また，正直な貧困世帯主（honest decayed householder）にも，彼らが家に居ながらにして，週毎の救済や給付金によって教区に住み続けながら給付が受けられるようにした。

また，同じように，多くの人に伝染するからといって，食器を投げつけられたり，ベルをならされたりしてシティから追い出されているハンセン病者に対しても給付をした。彼らもまた，家にいながらにして，給付金によって救済されるべきであるとされたのだ[47]。

「救済に値する貧民」と，「救済に値しない貧民」の区分，すなわち，ここでR. グラフトンの整理によれば１と２が前者，３が後者にあたるが，その後数世紀にわたるイギリス救貧政策の基本的枠組が，ここで既に用意されていることがわかる。

ここで確認すべきは，このような貧民救済の方法を決定し，実行を計画しているロンドン市の目的は，Ⅱにおいてみてきたように，「怠惰な貧民たちと浮浪する物乞いたち」の「ロンドンからの追放」，または「コモンウェルスに相応しいメンバーとする」ものだった[48]ことである。シティからの排除については，その後，定住法による救済対象の限定化が進められていく[49]。そして，「コモンウェルスに相応しいメンバー」となるような救済，彼らの包摂の手段が，子どもへの教育，訓練であった。

２．子どもへの注目とその実際

上記に引用した，ロンドン市が決めた貧民のなかでも子どもへの救済は，以下のようなものであった。R. グラフトンによる年代記より再度引用してみよう。

無垢で父のいない子どもたち，つまり物乞いの子どもたち，実に物乞いの種であり，種畜である者たち（the seede & breeder of beggery）には，ロンドンの元グレイ・フライアーズ，今で

はクライスト・ホスピタルと呼ばれた家が用意された。そこでは，貧しい人々は，物乞いの状態を打ち破る（overthrow）べく，神の知において教育（trayned）され，有徳な訓練（exercise）を受ける[50]。

ここで「子ども」とは，「コモンウェルス」つまりロンドン社会の秩序を乱す「物乞いの種」，根源と見なされ，その「教育」「訓練」とは，物乞いの状態で生きていくことを断ち切り，その状態を脱するために施されるものとされている。

エリザベス救貧法によって貧民救済が制度化される以前，その体系化を準備しつつあるこの時期に，都市ロンドンにおいて先駆けて整備されたロンドン・ロイヤル・ホスピタルにおける教育の貧民救済の文脈において，子どもへの救済とは，物乞いや浮浪者，ならず者といった，街の「無様で不愉快な」[51] 存在にさせないための教育，訓練を，貧しい子どもたちに施すというものだった。これが貧困児教育創始の論理である。

ここで注目すべきは，R. グラフトンは，本論でこれまで述べてきたように，このような貧民救済施設の設立に向けて，それに関わる主要な人々，組織と深く関係し，それらの意向を相互に交流させただけではなく，実際の貧困児救済の場に少なからず関わっていたことである。

CH の初期受付簿によると，1554年９月から1563年４月までの初期記録において，R. グラフトンの名前は，かなり頻繁に，計13件記載されている。

女子，３歳半，Mr. Grafton を介し，Sir Thomas Leigh によって委託される。
George ――，７歳，Mr. Grafton によって委託される。（1559/11/20）

Dorothie, ――，６歳，Mr. Grafton 宅の門前で発見，Eleyne Price によって，週４ペンスで養育されることとなる。（1560/3/13）[52]

初期の受付簿は，特に形式が一定なわけではなく，これだけの情報で，彼が他の役員に比べて救済に最も関与したと断定することはできない。しかし，救済受付簿に記名されている事例のなかでは，他の人物と比べると群を抜いて顕著であり，救済における実際の手続きや，行動にも積極的に関与していたことがわかる。

また，R. グラフトンが，印刷職人として欽定英訳聖書の印刷に携っていたことは先に触れた通りであるが，それと同時に英語初歩読本であるプリマー（English Primer）の印刷にも関わっていた。そして，CH の子どもたちにもそれを教えていた。

（カトリック信者メアリー女王即位後のプロテスタントへの）様々な動乱や粛清のなかで，グラフトンは，難なく自分の仕事を続行することができた。大法官ガーディナーでさえも，クライスト・ホスピタルにおいてラテン語教本の代わりにイングリッシュ・プリマーを子ども達に教え

たかどで，グラフトンを２日間しか留置できなかったのである。背後に静かに存在する影響力によって，彼は守られていた。おそらくは（グロサリー）カンパニーの幹部によってであろう[53]。

ここからは，R. グラフトンを擁護するパーソナルな関係を，またもや確認することができる。と同時に，英語による子ども達への教育に，実際に R. グラフトンが関わっていたことが判明する。CH 内での教育のために，学校教師（school masters）が雇用されていたこと，また彼らが，例えば執事や，女性監督者，料理人などに比べて給与が高かったことについては，マンジオーネが指摘している[54]。理事（Governor）である R. グラフトンが，どのような経緯，あるいは方法でプリマーを教えていたのか不明ではあるが，救済時のみならず，その後の教育にも携わっていたのである。

おわりに

イギリスにおける貧民救済は，エリザベス救貧法で体系化したとされるが，それ以前，ヘンリー８世期より徐々に整備され始めていた。エドワード６世期に実現化したロンドン・ロイヤル・ホスピタルは，貧民を社会の秩序を乱す脅威としてまなざし，彼らへの対応を，種別化し，類型化し，それに応じた施設を設置，その後の救貧の基本思想を用意したといえる。クライスト・ホスピタルは，そのなかでも，「無能貧民」の一要素である「（健康な男女の）子ども」の救済施設として，聖フランチェスコ会グレイ・フライアーズ修道院跡に始動した。

R. グラフトンは，CH 初期の救済受付簿の記録のなかで群を抜いて注目される存在である。本稿で明らかとなったのは，孤児・貧困児・棄児の救済に手を貸し，その教育にも携わっていただけではなく，王室，王室側近，ロンドン市の幹部役員，さらに大司教，主教といったイギリス国教会の有力者たちと，パーソナルな関係を保ち，宗教的，国家的動乱のなかにあって，近しい人を粛清で亡くしながらも自身は常に主流を支える位置において，王のプリンター，王子（のち国王）のサーバント，同業組合の幹部，庶民院議員としての職務をこなしながら，聖バーソロミュー・ホスピタルの財務担当役員（Treasurer）を経て，CH の財務担当役員，さらに理事（Governor）として，貧民救済，特に貧困児救済に努力を惜しまなかったようである。

R. グラフトンを軸とした，当時のイギリス国家，特にロンドン市の社会における，CH の設立と，初期の運営，つまりイギリス最初の貧困児救済の創始を支えた権力関係，公共圏のありようは，以上のようなものだった。どのひとつの主体も，その創始過程において不可欠なものであり，その関係性そのものが，イギリス救貧の発端を生み出した。それは，教区救済としての限定，追放などによる貧民の排除と共に，コモンウェルスに相応しい一員に仕立て上げる包摂の手段としての教育という論理を有していたのである。

〔付記〕この論文は，平成23-25年度科学研究費補助金　基盤研究（C）研究課題名「クライスト・ホスピタルの児童救済活動にみる近代初期ロンドンの養育と家族」の一部である。

註

（１） Pinchbeck, I. & Hewitt, M., *Children in English Society, Volume I*, Routledge & Kegan Paul, London, 1969, p.178.

（２） *Ibid*. p.175-199.

（３） 高田実「福祉の複合体」史が語るもの－＜包摂・排除＞と＜安定・拘束＞－」『九州国際大学経営経済論集』第13巻第１・２合併号，2006年； 金澤周作『チャリティとイギリス近代』京都大学学術出版会，2008年。

（４） Manzione, C.K., *Christ's Hospital of London, 1552-1598: "A Passing Deed of Pity"*, 1995

（５） *Ibid*., p.132

（６） Lempriere, William, Senior Assistant Clerk of Christ's Hospital, *John Howes's MS. , 1582. Being "a brief note of the order and manner of the proceedings in the first erection of" the three Royal Hospitals of Christ, Bridewell & St.Thomas the Apostle. Reproduced ant printed at the charges of S. V. Morgan. … With introduction and notes by W. Lempiere*, 1904.

（７） P.Slack, *Poverty and Policy in Tudor and Stuart England*, Longman, 1988., p.119

（８） 初期記録によれば，1563年４月10日時点で CH に残留していた330名，内生存者168名のうち，８名，53-54年簿では，生存者128名のうち２名がオックスフォード，ケンブリッジ大学に進学の記録がある。拙稿「16世紀中葉ロンドンの孤児貧困児救済－クラウスト・ホスピタル（Christ's Hospital ）初期記録より－」『九州大学大学院教育学研究紀要』第14号（通巻第57集）2012年，127頁。

（９） Slack, *Op.Cit*., 乳原孝『「怠惰」に対する闘い－イギリス近世の貧民・矯正院・雇用』嵯峨野書院，2002年。

（10） Pearce, E.H., *Annals of Christ's Hospital*, Methuen & Co.,London, 1901

（11） J. A. Kingdon, Master of the Company 1883-4, *Richard Grafton: Citizen and Grocer of London and one time Master of his Company, Servant and Printer to Edward Prince and King and First Treasurer General of Christ Hospital, A Sequel to Poyntz and Grafton*, Privately Printed by Rixon &Arnold Poultry, London, 1901

（12） *Ibid*., p.4.

（13） *Ibid*., p.14.

（14） *Ibid*., p.4.

（15） 小嶋潤『イギリス教会史』刀水書房，1988年，古川潔「英国清教徒の歴史（その一）－起源よりエリザベス朝初期迄－」高知大学学術研究報告第４巻第43号，1955年。

（16） Kingdon, *Op.Cit*., p.5.

（17） *Ibid*., p.6.

（18） *Ibid*., p.6.

(19)　*Ibid*., p.8.

(20)　*Ibid*., p.9.

(21)　Pearce, E.,*Op.Cit*., 1901, pp.1-32.

(22)　*Ibid*., p.10.

(23)　*Ibid*., p.21.

(24)　*Ibid*., p.21.

(25)　*Ibid*., p.22.

(26)　*Ibid*., p.23.

(27)　Pearce, E.,*Op.Cit*., 1901, p.12.

(28)　*Ibid*., pp.23-24.

(29)　*Ibid*., p.26.

(30)　*Ibid*., p.30.

(31)　*Ibid*., p.29.

(32)　Grafton, R., *A Cronicle at large, and meere History of the affares of England; and Kinges of the same, deduced from the Creation of the worlde, unto the first habitation of thys Islande, and is by cotynuance to the first yeere of…Queene Elizabeth.B.L*., 1569,（rep., 1809, ）, p.529.

(33)　主教リドレーの説教の前に，貧民や病人，浮浪者たちが徘徊し，物乞いをしている状況に対し，「ほんの少しの芝生の空間があったなら，彼らを静かに勤勉にさせることができるでしょう」という説教が聖ジョンズ・カレッジの教師によって国王エドワードに対して行われている。拙稿，2012年，127頁。

(34)　*John Howes's MS.（Op.Cit.）,* p.1

(35)　*Ibid*,. pp.6-7.

(36)　*Ibid*,. p.21.

(37)　Kingdon, *Op.Cit*., pp.28-44.

(38)　*John Howes's MS.（Op.Cit.）,* pp.9-10.

(39)　*Ibid*,. p.19.

(40)　*Ibid*,. p.23.

(41)　Manzione, C.K., *Op.Cit*.

(42)　Kingdon, *Op.Cit*., p.54.

(43)　*Ibid*,. p.32.

(44)　注38箇所を参照。

(45)　Kingdon, *Op.Cit*., pp.28-44.

(46)　Pinchbeck, I. & Hewitt, M.,*Op.Cit*., pp.92.

(47)　Grafton, R., *Op.Cit*., pp.530-531.

(48)　注38箇所を参照。

(49)　川田昇『イギリス親権法史－救貧法政策の展開を軸にして』一粒社，1997年，27頁。

(50)　Grafton, R., *Op.Cit*., p.530.

(51)　注35箇所を参照。

(52)　*Christ's Hospital Admissions Vol.1, 1554-1599*, Published by authority of the Council of the Almoners of Christ's Hospital, Harrison and Sons, 1937.

(53)　Kingdon, *Op.Cit*., p.80.

(54)　Manzione, C.K., *Op.Cit*., pp.39-63.

野々村　淑　子

The Social Context of Invention of Education for Poor Children: Richard Grafton's Relationship with the Authorities In Early Days of Christ's Hospital

Toshiko NONOMURA

Christ's Hospital (CH) was established by London Corporation in 1552 transferred the authority from Henry VIII. CH was the special institution for healthy children. This paper focuses the social context, that is, the relations among the authorities that founded CH, one of the London Royal Hospitals, the largest welfare system in Tuder England.

The London Royal Hospitals, for the relief and the exclusion of the poor by London Corporation, classified the poor, founded the hospitals for each, and prepared the basic thought throughout the poor relief in England.

Richard Grafton, a grandson of Adam Grafton; the chaplain of Edward V, the printer of English-translated Bible, the King's printer, the prince's servant, warden of the Grocery Company, a member of Parliament, was also the Treasurer and Governor of CH. Through the work of R. Grafton, we can trace the social context in early days of CH, one form of welfare complex in early modern England.

R.Grafton, as the printer of English Bible, was allowed to live in Grey Friars, belonged to the group of 'New Learning'. The archbishop Crammer and Thomas Cromwell helped R.Grafton's work. Mayor and Aldermen of London Corporation made petitions to give the management of Gray Friars, and other religious houses belongs to the Crown for the relief of the poor. R.Grafton, by his personal relation to the Crown and the Bishop, would do something to them.He not only devoted himself to the support for the foundation of CH, but also did the relief work, for example sending children to CH and teaching English Primer to CH children.

We can trace, through R.Grafton's course, the Kings, the brains of the King, the leading member of the Anglican Church, London City, and the Grocery Company, were the main actors each, and they founded CH with mutual relationship. They each acted for the foundation of CH, R.Grafton located himself the center around which they moved. Thus, the education of the poor children in CH was invented as the way of inclusion the poor into the commonwealth, by teaching and training for 'the proffitable members in the common wealthe'.